「論説」文禄五年豊後地震における奈多宮の津波高

四国電力株式会社* 松崎 伸一

郷土史研究家 日名子 健二

大分県立芸術緑丘高等学校 平井 義人

Estimation of Tsunami Height at Nada-gu in the 1596 Bungo Earthquake Shinichi MATSUSAKI

Shikoku Electric Power Co., Inc., 2-5 Marunouchi, Takamatsu, Kagawa, 760-8573 Japan Kenji HINAGO

Local History Researcher, 3-10-5 Yakuin, Chuo-ku, Fukuoka, 810-0022 Japan Yoshito HIRAI

Geijutsu Midorigaoka High School, 1-11 Uenogaoka-higashi, Oita, 870-0833 Japan

The 1596 Bungo Earthquake is well-known as the earthquake that caused tsunami damage to coastal area of Beppu bay. Nada-gu, which is historically famous shrine in Kitsuki city, Oita pref., is located on the north shore of this area. This shrine was also attacked by the Bungo Earthquake Tsunami. A historical document reports that the 1596 tsunami washed away all structures of the shrine. From this description, previous studies estimated tsunami height at Nada-gu as 7-8 m or 8.4 m above sea level. However, we found another and older historical document named Kankyo-kougou that reports Wakamiya-shrine of Nada-gu was not washed away by the 1596 tsunami. We try to reevaluate tsunami height at Nada-gu based on Kankyo-kougou. Since Wakamiya-shrine was not washed away, it is not be able to estimate tsunami height as more than 7 m judging from the local topography. Kankyo-kougou also tells us that worship hall was washed away in 1596. Worship hall was rebuilt in 1627 on the ground of 6 m height. We think this fact means that worship hall was moved and rebuilt not to be flooded again, i.e., tsunami height at Nada-gu was lower than 6 m. Furthermore, Kankyo-kougou reports the 1596 tsunami damage of Kamo-shrine and Kanba. These spots are near to Nada-gu, located within 4 km from Nada-gu. Tsunami height of them are estimated around 4-5 m. Then we conclude that tsunami height at Nada-gu from the Bungo Earthquake was under 6 m.

Keywords: 1596 Bungo Earthquake, Tsunami height, Nada-gu, Kankyo-kougou.

§ 1. はじめに

文禄五年(1596 年)豊後地震は、別府湾沿岸に大きな津波被害を与えた。その被害記録の多くは別府湾の南岸側に残されている。北岸側における被害記録は少ないが、そのひとつに奈多宮(図1,図2)の被害記録がある。奈多宮は、大分県国東半島南東部の杵築市にあり、文禄五年の豊後地震津波で社殿が流失したと言われている。その記録を基に、先行の研究では奈多宮における津波高を7~8 mとする指摘[羽

鳥(1985)]や8.4 m とする指摘[都司・他(2012)]などがなされている.

しかしながらこれらの研究が津波高の推定に用いた情報の出処は、§ 3で詳述するとおり『豊城世譜』 [是永(1834)]であり、地震の約 240 年後に成立した 史料である. また、先行研究では流失した社殿位置 は現在と変わらず、かつ地震当時の社殿の地盤高も 現在と同じと仮定しているが、それを証する根拠が不 明である. したがって津波高の推定については十分

^{* 〒760-8573} 香川県高松市丸の内 2-5

電子メール: matsuzaki12987 @ yonden.co.jp

^{† 〒810-0022} 福岡県福岡市中央区薬院 3-10-5

^{‡ 〒870-0833} 大分県大分市上野丘東 1-11

な検証を要すると考える.

§ 2. 奈多宮の由緒

奈多宮の由緒は、『杵築市誌』[杵築市編集委員会 (2005)]によれば以下の通りである.

奈多宮は大分県杵築市奈多の海岸に鎮座し、神社の眼前には奈多・狩宿海岸の砂浜が広がっている(図 3). 祭神は応神天皇、比売大神、神功皇后である. 奈多宮の前身は古く、古墳時代には当時勢力拡大をはかっていた宇佐氏と交易関係を持っており、この地の豪族は奈多宮沖市杵島(図 3, 図 4)に示現したと伝えられる比売大神を小祠に祀り、守護神として尊敬してきた. 神亀二年(725年)に宇佐宮が創められ、奈多宮が創祀されたのは天平元年(729年)とされている.

永延二年(988年)には、一条天皇から「日本最上八幡初中後廟」(過去現在未来にわたって最上の八幡であるとの意)の宸筆の額を賜った。また関白・藤原道長(966-1028)は、「一宮海雲楼」、「三韓降伏」の額を楼門に掲げた。さらに康和年中(1099-1104)には公卿・大江匡房が「一楼台」の額を奉納した[筆者注:大江匡房は承徳二年(1098年)に大宰権師として太宰府へ着任。九州管内の状況視察の折、奈多宮にも立ち寄り、楼台からの眺望に感動し筆をとったと推測する]。このように、代々朝廷・貴族の尊崇は極めて厚いものがあった。

戦国時代には、大友義鎮(宗麟)が奈多大宮司の娘を正室として娶るなど、奈多氏は栄華を極めた.しかし、天正十五年(1587年)に奈多鎮基が没すると、実子がいないため奈多氏は断絶した.そしてこの年、豊臣秀吉が島津氏との戦いのため九州に下り、奈多宮の神領は没収された.

さらに文禄五年(1596年)には豊後地震津波により、「一条天皇宸筆の額をはじめ、神殿・拝殿・回廊など、数多くの古記録は流失し、わずかに諸神職所持のものを残すのみとなった」[『杵築市誌』(2005)].しかし寛永四年(1627年)には流失した建造物の根本的な造営(本殿、白殿、拝殿等)が完成。同十九年(1642年)には、現存する楼門・鳥居・手水鉢などが建立された。そして、その後は、細川家等代々藩主の崇敬を受けるとともに、広く世人の尊崇をも集めてきた。

§ 3. 奈多宮の津波高に関する先行研究

豊後地震における奈多宮の津波高について論じた知見を以下に整理する.

3.1 羽鳥(1985)

羽鳥(1985)は、津波史料をもとに別府湾沿岸の現 地調査を行い、現地の地盤高をふまえて各地の津波 の高さ(平均海面上)や浸水域の広がりを検討したも のである.

奈多宮については、「別府湾口北岸の奈多は、ゆるやかに傾斜した砂浜が広がり、砂浜に面した森の中に奈多八幡宮がある。慶長津波によって、「奈多八幡宮の神殿神庫社殿悉く海嘯のため流さる」、また「本社拝殿楼門鳥居残らず沈没す」と記録されている(杵築郷土史)、神社境内の地盤高は、ハンドレベルで測定すると、平均海面上6.1 mであった。このような台地にあった神社が流されたことから、津波の高さは7~8 m に達したとみなされる。」と述べている。

この他, 守江湾の他地点における推定も行ってい る(図 5)ので、§ 5~ § 6における津波高推定の議論 に資するため、以下に紹介しておく. その位置につい ては図 6 を参照されたい. 羽鳥(1985)は, 「杵築海岸 は、現在砂州が幅広くひろがり潟のようになっている が、住民の話によれば、戦前は今ほど砂州がなく、大 型船が出入りできたという. 慶長津波の被害状況は はっきりしないが、「納屋御堂の地数十町海中に陥没 せり」とある(杵築郷土史). 御堂は今の納屋漁港付 近を指し、高さ10数mの笹山の山頂に小さなお堂が ある. 土地の人は、これを金刀比羅さまと呼んでいる. 杵築城下の護岸付近の地盤高は 1.5 m 程度で,納 屋漁港付近も低地である.この一帯が浸水したことか ら、津波の高さは4~5 m であったであろう. 」としてい る. さらに神場(現在の住吉浜)についても、「納屋漁 港対岸の住吉浜は、現在リゾートパークの観光地に なっている. その入口付近の神場は人家がまばらで あるが、文禄年間には湊として栄えていたという.この 地域が「津波に沈没して水底と成. 今十町斗り沖に 立たるミヲ木は、観音堂の跡水底に残りし岩尾の上に 建る. 是は土人(出入)の船の為に建置かし也. 其外 沈没みつからず」とある(藩祖中川秀成公三百五十 年祭典誌). これは神場洲において地盤沈降があっ たことを暗示している. 」と述べており、津波高を 4~5 mとしている.

3.2 都司・他(2012)

都司・他(2012)は、羽鳥(1985)による豊後地震の津 波痕跡高地点を対象に、測定精度の高い RTK-GPS を利用した地盤高の測量を実施し、津波痕跡値の精 度向上を検討したものである.

都司・他(2012)は、羽鳥(1985)が津波高を推定した3地点(奈多宮,神場州,納屋御堂)のうち、奈多宮の測量を行っている。そこでは、「『杵築郷土史全』によれば、「八幡奈多宮の神殿神庫社殿悉く海嘯のために流さる。」とあり、『勝山歴代・豊城世譜』では、「奈多宮本社拝殿楼門鳥居残なく沈没す」とある。よって、奈多神社を調査対象とした。『国東町史』には、「(前略)奈多八幡の社殿は流失し、海岸一帯は惨状を呈した。(前略)さきに地震大津波で流失した奈多八幡宮の再興と、百五十年間中絶していた宇佐行幸

会の復活である. 元和二(1616)年十一月八日みごとな行幸会が行われた」とあり, この前後に奈多神社は再建されたものと考えられる. 杵築(きつき)城下町資料館の職員によると, 慶長地震の時から場所は変わっておらず, 神社は地震後に再建したが, 同じ場所に建てられたとの事である. 」, 「境内の地盤高を測量すると T.P.+6.36 m となった. 社殿が流れた事から津波浸水深を 2 m と仮定すると, 津波高は T.P.+8.4 m と推定できる. ちなみに羽鳥(1985)による推定津波高は 7~8 m である. 」と述べている.

3.3 平井(2013)

東日本大震災の直後に大分県は津波対策の再検 討を実施した. その「地域防災計画再検討委員会」 における作業の結果として導き出された知見を,「古 文書に見る大分の地震・津波」としてまとめたものが, 平井(2013)である.

平井(2013)は、その報告の中で『豊城世譜』における下記の記述:

慶長元年七月十二日当イワウ灘より津波起り,海辺都而沈没す. 奈多宮本社拝殿楼門鳥居残りなく沈没す. 神場州といふは,文禄年中迄ハ州崎より南の沖の方へ十町斗り州有て,並木の松原茂り栄へ,其末に観音の有て此辺の士農工商歩ミを運び,依之此州の内ハ波風なく旅泊の大船小船も碇を入,纜を結事なく,天下無双の湊なりしか,津波に沈没して水底と成り,今十町斗り沖に立たるミヲ木は観音堂の跡,水底に残りし岩尾の上に建ル. 是ハ出入の船の為に建置きしと也. 其外沈没少なからす,文略之.

を引用した後に、「史料の記述分析と現地調査をもとに羽鳥徳太郎氏は、奈多八幡宮を襲った津波を7~8 m(中略)と推定した。」と述べているが、最終的に平井(2013)は八幡奈多宮の津波高を海抜約6 mとしている。一方、検討委員会による成果のひとつである『大分県地域防災計画一地震・津波対策編一(平成26年6月)修正の経過』[大分県(2014)]でも、『豊城世譜』を根拠史料に津波高を6 mとしている。検討会においては、津波シミュレーションの結果とも照らし合わせた総合的な判断を行い、6 mという値を導き出したものである。

3.4 先行研究における問題点

先行研究が津波高推定に用いた史資料の記述を 表1に整理する.

羽鳥(1985)は、奈多宮における情報として『杵築郷土史』[杵築町教育会(1933)]を用いている。根拠として示されている、「奈多八幡宮の神殿神庫社殿悉く海嘯のため流さる」及び「本社拝殿楼門鳥居残らず沈没す」という記述については、前者は確かに『杵築

郷土史』にあるが、後者は『杵築郷土史』にはない、『豊城世譜』にほぼ同じ文章がある(表 1)のでこの引用と思われる. そして、前者の記述も、津波被害にあった建造物が、

『杵築郷土史』:神殿神庫社殿 『豊城世譜』:本社拝殿楼門鳥居

という違いはある(『杵築郷土史』では神庫が加わっている)ものの,内容的にはほぼ同意である.よって,羽鳥(1985)の奈多宮における推定は、『豊城世譜』に基づいていると考えることができる.また,神場州では、『藩祖中川秀成公三百五十年祭典誌』[北村(1962)]を出典としているが,これも当該資料にその記述はなく、『豊城世譜』にほぼ同じ文章がある(表 1).したがって,納屋御堂を除いて,羽鳥(1985)の根拠は『豊城世譜』であると考えてよいであろう(納屋御堂については4.2.1で後述).

次に、都司・他(2012)が根拠とした史資料は『豊城世譜』、『杵築郷土史』、『国東町史』である。『杵築郷土史』については羽鳥(1985)と同様で、『豊城世譜』を根拠としていると思われる。『国東町史』における社殿流失という情報も『豊城世譜』における情報と同じ内容である(表1).したがって、都司・他(2012)の根拠史料も『豊城世譜』と考える。

そして、平井(2013)については、史料と津波シミュレーションに基づく判断であるが、根拠とした史料に関してはあくまでも『豊城世譜』に過ぎず、それ以外の史料は使われていない。

したがって、既往の研究は『豊城世譜』に基づいているといえる.しかしながら、『豊城世譜』は後段で詳述するとおり、1834年の成立であり、地震の約240年後の史料である.また都司・他(2012)は、きつき城下町資料館職員の証言を根拠に、奈多宮の社殿は「慶長地震の時から場所は変わっておらず」としたが、証言に対する検証を行っていない.さらに、豊後地震当時の社殿の地盤高を証する根拠も不明である.したがって、奈多宮における津波高を論ずるには、『豊城世譜』以前のより地震発生時に近い史料の発掘が鍵になると考える.

§4. 史資料の精査

先行研究で用いられた史資料も含めて、史資料の精査を行った.精査の結果、これまで歴史地震の分野で知られていなかった史料である「一楼台」の額や『閑居口号』[諏訪(1711)]に、豊後地震津波の記述があることを確認した.以下に、江戸期の史料と明治期以降の資料とに分けて整理する.奈多宮周辺の津波被害記述については下線を付し、さらに表2にも整理する.

4.1 江戸期の史料

4.1.1 「一楼台」の額(1663)

「一楼台」の額は、平安時代の公卿・学者・歌人である大江匡房が、康和年中(1099-1104年)に奉納したものである。しかしながら、豊後地震津波で流失したとされ、奈多宮の宝物殿に現存する額(図7)は寛文三年(1663年)、細川藩長岡寄之自らが奈多宮に参詣し奉納したものであり、松堂隠元の筆である。その額裏文(図7)は、『杵築市の文化財(第二集)』[杵築市教育委員会(1978)]によって調査されており、

豊後国奈多宮者,八幡大神自宇佐宮以前,権輿之霊場而,天平元年再自宇佐影降鎮座之霊祀也,有拠説自一条皇帝賜宸筆之廟額,所謂日本最上八幡初中後之十字也,楼門陽額者三韓降伏之四字殿下御堂殿之筆,而陰額者一楼台之三字黄門江師匡房卿之筆也,前楼門者探題修理大夫左少将大友義鑑君,天文十五年造替焉,慶長元年秋津浪,諸殿没溺于蒼海,為松浜矣…(略)…八代刺吏佐渡守長岡興長,同(寬永)十七年造替楼門廻廊,今之楼台是也,興長息筑後之守寄之,使大光善照国師,書一楼台之三字,以寬文三年八月廿九日詣当宮奉納之訖…(略)…

とある. 諸殿が浸水し, 松の浜になったことを書き留めた, 地震から約 70 年後に成立した刻文である. また扁額が楼門に掲げられていたことも記している.

4.1.2 『閑居口号』(1711)

『閑居口号』は、「安岐町・杵築市の神社・仏閣の由来を知ることのできる、最も古い史書である」「杵築藩研究会(1993)」. 著者は杵築藩士・諏訪寛村といい、百石の武士であった. 子供がいなかったために、宝永二年(1705年)、73歳のときに御暇を賜り、安岐の竹林の中に草庵をしつらえて隠居の身となった. 「こし方行さきの事ども尋ねみんと思い立ちて」[『閑居口号』]、自ら神職や僧侶を訪ね歩き、草創の由来を尋ねるなどしてこれをまとめた. 跋文の日付は正徳元年(1711年)十月となっている.

この『閑居口号』には、豊後地震津波の記述が多く 残されている.以下に、その関係する個所を列挙する. その位置については図6を参照されたい.

①加茂社

依之只今ある所の社壇の上,小高き所に叢祠を造立して,加茂大明神とあがめ奉り,(略)衆人評議して,如斯岸の下に社壇を移しける.(略)凡御神託以来,星霜を経し事五百八十余年と覚へる.

(略)

昔より石の華表ありしが,慶長元年七月の津浪に 打ち倒れ,笠木も地に落ちて,御座有りし処に,寛文 十一年辛子に,三州吉田の御城下小笠原佐州公の御家来,鳥羽氏造立寄進あり.

②奈多宮

宝永五年(1708年)もくれて年立帰り、春にも成りぬれは、人の心もおのづから、うき立つ最長閑にて、四の海の浪も静に風枝をならさぬ時なれば、いざ宮めぐり初めむと、例の友人誘引し、先ず奈多八幡に参らん(略)

斯處に奈多大宮司,井戸文治季基に対談し,当所の謂れを尋ければ答て申やう,其古の旧記等兵乱火難に悉く紛失し,慥成記録無之候.

(略)

殊に慶長元年(1596 年)の津波の時, <u>本社拝殿悉く</u> <u>汐にて打潰</u>し, <u>波に引きとられ神宝旧記も此時に至</u> て紛失仕ける.

(略)

当社再興之事ハ寛永四年(1627年)の秋,長岡式部 少輔殿御建立あるべしとて,白銀三十六貫目御寄進 被成候.則片山八郎兵衛幸増請取之,材木を集め 大工小工を撰み,本社并拝殿を造立す.

(略)

本社造営以後四十余年に及びしかは,上葺所々破損によって,社寺支配方へ訴ければ,則葺替被仰付,其時棟札あり,

(略)

慶長元年(1596 年)七月,当い巳う灘(いおうなだ) 津波にて豊後国海辺悉く潮にひかれ,所々破損し人 民牛馬死亡せしは不遑計と申つたふ.当奈多宮は取 分け海辺と申地形も高からされは,潮よくあたり,<u>本社</u> 拝殿楼門鳥居,不残潮にひかれてあとかたなく成りけ <u>る</u>に,<u>若宮殿一宇</u>,少しも損じ不申事奇代なりける例 成りと,皆人申し伝ふと語りし(略)

(略)

此外奇説あり、如此子細にて彼の津波の時も、<u>若</u> 宮殿は損して玉はぬなるべしと語りける.

③市杵島(気嶋・御机石)

福田山の麓, 気嶋御机石御立野といふ事を尋ねければ, 大宮司文次答へて申やう, 先福田山と申すは, 奈多村西の方大山の事に候, 則御社と一村の間に山より, 落つる川を梅田川と申なり, 又気嶋と申は, 御机石と気嶋より五丁計り沖に, 三ツノ巌ならびてあり. 昔は干落ちたる時は, 干あがりて見えしが, 慶長元年(1596年)の津波に打崩しけるや, 夫より後は干あがることなしと申伝ふ. 今は海底一丈斗り下に, 三躰の岩見へ申也. 御立野と申は本社より南の方に有りしと語る.

④神場御旅所•神場州

折節潮みちぬれば難所なり、岩間を伝ひ行き、矢

辺の入江を渡り神場にたどり着きぬ. 案内の者の云ひけるは, 行は右の方大山の麓, 少し小高き處は昔十月十四日奈多八幡放生の池に行幸ありて, 夫より此神場州に御幸あり. 依之此所に御殿を建楼門廻廊神楽屋御供所舞台をもたて置ける. 其夜於廻廊笠着の連歌有之, 一順終て以後懐紙を京都へ遣し, 清家の点を取りて宝蔵に納置也. 翌十五日には恒例の神場能七番あり, 脇能は大宮司舞之, 其外ハ松満以外の大夫勤也. 勿論貴賤群をなせり.

同十七日還宮なし、奉る行幸は右に記す迁宮の時に相同じ、雖然其比は都鄙ともに世上穏ならず、神事祭礼等も世と共に衰微し、殊更慶長元年(1596年)七月の津波に奈多本社拝殿、又当神場御旅所の御殿諸楼等、潮に引取られ、今は磴の石斗残れる。されども其翌年は神場の跡に仮殿を志つらひ、行幸なし奉る。其後当正徳元年(1711年)に至って百五十年退転すと、井戸(門)文治語りけり。

扨又神場州と云事は、文禄年中迄は今の州崎より南の沖の方へ十町斗り州ありて、並木の松原志げり栄へ、其末は観音堂ありて此辺の士農工商常に歩みを運びける. さるによって此の州の内は波浪なく、旅泊の大船小船も碇をかけ、纜を結ふ事なく天下無双の湊なりしか、慶長元年(1596年)津波に悉く打崩して跡形もなく成りぬ. 今十町斗り沖に立ちたるみほ木は、彼観音堂の跡水底に残りし岩尾の上なり. 是は当津出入の船の為に立て置きたる、みほ木也とて、道すがら此物語りを聞きて行けば、無程住吉大明神の鳥居に至る.

[筆者注:御旅所とは、神社の祭礼において神(神体を乗せた神輿)が巡幸の途中で休憩または宿泊する場所のこと。その祭典の記述は、寛村が『八幡奈多宮年中行事之次第』(室町後期作)から引用]

⑤磯崎八幡

寛村は,矢辺村の村司佐藤某の宅へ立寄った際に 天村八幡の草創の事等を尋ね,主が語った話を以下 のように記している.

扨又当村に鎮座します天村八幡の御事,其前は磯崎八幡と申奉る. 其草創は古,承久二年(1220 年)漁夫ども此浦にて網をおろし漁をせしに,何やらん三躰網にかからせ玉ふに,気も不付其の侭海に投入ける. 其後又所を替へあみを引けるに,彼の三躰引揚ければ,不審に思ひて佐藤氏へ其旨趣を告げける. 皆々集合して見れば,阿弥陀・薬師・観音の三尊也. 奇異の思ひをなして,成久村社人河野某を招て,神鬮を取りて神託を窺ひし所に,是は八幡之所の霊神也と御託あり,則三石と云,巌の上に叢祠を造立し,当所守護神と尊敬し,磯崎八幡と申けるが,然る処に慶長年中,いわう灘大津波の時,叢祠神躰共に滅亡し,

跡形もなくなりしに、猶も神霊不朽して、慶長十五年 (1610年)に至て浦の海士人、網をおろして漁猟せしに、彼霊神三躰網に入りて上り玉ひしかば、所の農民歓喜して、則木付城主松井佐州康之殿へ達して、社壇を天村に造立して、神主河野左京通晃、宮司佐藤三郎兵衛家次等、会合し迁宮なし奉る也.

4.1.3 『豊城世譜』(1834)

『豊城世譜』は杵築藩士・是永六雅の編集による史 料である. 『豊城世譜』を活字本化した郷土史研究 家・久米忠臣は、久米(1997)で次のように史料批判を 行っている.「豊城世譜の史実としての価値であるが、 採用した根本史料は編纂された各地の資料を、その 真偽を十分検討する事なく、書かれているから正しい として是永六雅(亀由仙)は採用したようである. だか ら間違った記述のところは、検討する事なく採用して いる. 当時の歴史研究としては、致し方のないことで あろう」と述べている. したがって, 是永六雅のスタン スは『豊城世譜』の末尾に見られる通り、「竹深亭亀 由仙寫」であり、六雅自身が著したものではないこと に留意したい、引用史料としては、『閑居口号』、『豊 府聞書』などが示されている. また序文には「天保五 歳在甲午晩秋(1834年)編集」とあり、末尾には「天保 十一庚子(1840年)苍見月増補」とある. 豊後地震津 波の部分は本文上段の余白に細字で記されているこ とから、増補時に追記されたものと思われる.しかし天 保十一年の「当初の原本は行方不明」[久米(1997)] とされている.

この『豊城世譜』には豊後地震津波について以下の記述がある.

①杉原長房(木付城主)の段落

慶長元年七月十二日当イワウ灘より津波起り,海辺都而沈没す. 奈多宮本社拝殿楼門鳥居残りなく沈没す. 神場州といふは,文禄年中迄ハ州崎より南の沖の方へ十町斗り州有て,並木の松原茂り栄へ,其末に観音の有りて此辺の士農工商歩を運び,依りて此の州の内は波風なく旅泊の大船小船も碇を入れ,纜を結ぶことなく,天下無双の湊なりしか,津波に沈没して水底と成り,今十町斗り沖に立ちたるミヲ木は観音堂の跡,水底に残りし岩の上に建てる. 是は出入の船の為に建置きしと也. 其の外沈没少なからす,文之略.

[筆者注:『閑居口号』では 4.1.2②で記したとおり七月とあるのみで,日付の記載はないが,『豊城世譜』では十二日という具体的日付が出てくる.]

②細川忠興の段落

又一条天皇は八幡大神の徳光を仰ぐの地評多く ありといへども, 奈多宮は応神天皇の在世に始まる事 実績を以ってして, 初中後此大廟の最上たる事を叡 感在して,永延二年戌子(988)丑,日本最上八幡初 中後廟十字の宸筆を奉納す. 是日本惣廟なり.

又関白道長公同時に一宮海雲楼の五字を奉納す. (中略)以後宮殿を皇居或は大廟と同じく粧飾す.又 三韓降伏の四字も御堂関白の筆,一楼台の三字は 黄門江師匡房の筆,八幡宮の三字は僧空海の筆 也.

(略)

慶長元年丙申<u>海溢洪水の時破損沈没</u>の後, 邦君 中興, 君当宮の衰微を愁歎し, 假に宮殿を再建し給 う.

4.2 明治期以降の資料

明治期以降の資料としては,

『杵築史考』「前田(1914)〕

『杵築郷土史』「杵築町教育会(1933)]

『安岐町史』[安岐町史編集委員会(1967)]

『杵築市誌』[杵築市誌刊行会(1968)]

『国東町史』[国東町史刊行会(1973)]

『杵築市誌』[杵築市誌編集委員会(2005)]

を精査した. 豊後地震津波についての記述は表 2 に抽出したが、このうち重要と考える、『杵築史考』、『杵築郷土史』、『杵築市誌』(1968)については、以下に紹介する.

4.2.1 『杵築史考』(1914)

『杵築史考』は前田光利編集による. 豊後地震について、第8章地変に以下のように記されている.

慶長元年丙申閏七月十二日大に地震海嘯の變あり、東村納屋御堂の北方白沙青松約数十町歩海中 に突出し大樹巨木蓊蔚として茂り茲に観音堂や夷社 等も設立せられ、風景佳なるを以て艶陽台蕩の候に際しては詩人墨客の杖を曳きて散策を試みる者も多かりき、然るに天変地異の災を被り一朝にして海底に陥没せり今や御本(尾本)の断崖僅かに其切片を存するのみ、嗚呼桑田碧海乃變恐るへきことならすや、 函替海上に横はりし瓜生島の崩潰して海底に陥没せしも此時に在り、瓜生島は大分郡の北函替海中に横はあり、一孤島にして東西の長さ一里南北二十町周回三里餘を有し数十戸の人家及び三四の神社仏閣ありたり、(略)、奈多八幡社宝庫の崩潰漂流して、宝物古器類の欠損せしも亦此時にありと云ふ

本資料は、奈多宮宝物の流失を記述するものの、 社殿流失については言及していない。また、納屋御堂の被害を述べているが、原本となる史料について は現在のところ、明らかではない。なお、引用書目の リストには、『閑居口号』は含まれているが、『豊城世 譜』は含まれていない。

4.2.2 『杵築郷土史』(1933)

本資料は、杵築町教育会が、「郷土史を編纂して治政の推移を録し、祖先の功業を列ね、永く後昆に伝へんと欲し」て、昭和八年四月に発行したものである。

ここには、「慶長元年閏七月十二日大地震あり 納屋御堂(今の東村)の地数十町海中に陥没せり(杵史) 八幡奈多宮の神殿神庫社殿悉く海嘯のために流さる、府内沖瓜生島の海中に陥没したるもこの時なり、有名なる伏見城の大震もこの時なり、」と記されている・納屋御堂の記述の根拠として示されている"(杵史)"は、『杵築史考』を指すと考えられる。

4.2.3 『杵築市誌』(1968)

当時の杵築市教育委員会内杵築市誌刊行会が編集・発行した市誌であり、以下の記述がある. 明治期以降の資料としては一番記述が豊富な資料である. その情報のほとんどは『閑居口号』から得ている.

①第二編 地史観光 「慶長地震(大分地震)]

慶長年間は、政権の交替時期で、慶長五(1600)年には、関が原の戦などもあり、世情騒然たる時代であったが、地震も多かった、慶長年間だけでも 11 回を数える. その最初がこの大分地震である. 元年閏七月十二日(1596年9月4日)大分市カンタン沖の瓜生島が陥没したのもこの地震で、有名な伏見大地震の前日である. 規模はマグニチュウド 6.9 であった.

(中略)

そのとき発生した津浪は、別府湾を渡って奈多海岸に打ち揚げ、奈多八幡宮を流失. 市杵島もかなり形を変えたし、東地区の高須御堂の東一帯にあった、松林が海中に没したのもこの時である。またやはりこの津浪で、東守江の砂嘴の先端部が数百 m 流失した(現在は砂嘴自然成長復旧) (後略)

②第二編 地史観光 古蹟めぐり(天村八幡社跡)

初めは磯崎にあり、磯崎八幡といっていたが、1596 (慶長元)年の<u>つなみに流され</u>、のち現地に移して改称した. 佐藤氏の記録によると、1220(承久二)年漁夫の網に、仏像とも神体ともつかぬ、3 個の石塊がかかった. 一度は海に捨てたが、また網にかかった. そこで成久村の社人河野某を招き、みくじを取り、神託をうかがうと「八幡三体の霊神なり」との託宣. ただちに巌上に祠を建て、守護神と崇め奉ったという. しかし慶長のつなみにより<u>社祠もろとも海にのまれた</u>が、慶長十五年またまた網にかかり、村人に迎えられた. 木付城代の松井康之はこの話をきき、天村に社を造営. 神司河野左京通晃・村司佐藤三郎兵衛らにより、遷宮されたというのである. (略)

③第二編 地史観光 古蹟めぐり(住吉浜 神場)

住吉浜を神場と呼び、奈多八幡御神幸の場で、むかしはここに神殿・廻廊・舞楽堂・楼門、供廻りの休息所などがたち並び、毎年十月十四日、渡御あって一夜御駐泊、舞楽や神楽・連歌の催しなどあり、群衆市をなす盛況であったから、神場の名が生れたという。ここも慶長のつなみに一切壊滅してから神幸もやみ、今はその跡に小さな社を見るのみである。

④第二編 地史観光 古蹟めぐり(住吉浜 一ノ洲) 守江湾を守る白砂の洲を,一ノ洲という. 先端に燈台がある. そのほとりにかって観音堂があり,いこいの地であったが,慶長つなみでまっさきに崩壊,洲の先端も大半が海底に消え,自然がつくった守江湾の防波堤がなくなった. 藩では御船手に出入する船に命じて,その船の石数によって捨石の数を割り当て,むかしの洲の姿を再現しようとつとめた.

[筆者注:一ノ洲とは神場州のこと(図 6).]

⑤第二編 地史観光 古蹟めぐり(奈多八幡宮)

慶長の大地震によるつなみのため、<u>社殿諸記録な</u>ど、一切流失したのはおしまれる.

⑥第二編 地史観光 古蹟めぐり[市杵島(気島)]

(奈多宮の)社前の海上一町あまりの沖にあり,市 杵島姫命が御着船の島である. 長い年月波浪に洗 われ,慶長の津浪に削られ,がいこつのようになって いるが,むかしはりっぱな島であり(後略)

⑦第二編 地史観光 古蹟めぐり[御机石(三机石)] 市杵島から更に沖の方に,三箇の岩礁がある.海に沈んで見えないが,むかし応神天皇が,お着きになった島がここで,…(中略)…. 御杖を立て,気を安め給うたので. 御杖島が正しいのではないかとの説もある. 慶長のつなみに崩壊した.

⑧第六編 社寺宗教(奈多宮御旅所)

六年に一度の神幸は、宇佐行幸会として、元和二年まで断続して行われたが、今は廃絶している。御旅所は野辺の住吉社境内に仮設(閑居口号では慶長の津波のとき、御旅所の社殿廻廊はすべて流失した。三日間にわたる祭典の状況が記されている). 現在の御旅所は御池付近に常設されている.

⑨第六編 社寺宗教 (奈多宮)

永延二(988)年一条天皇下賜の御宸筆「日本最上八幡初中後廟」を拝受したのは、大宮司奈多大和守従四位侍従宇佐宿祢国基である. この額は慶長の津波で流失したが、拓本が残り現在の額はこれをまねて造られたものである.

(略)

さらに慶長元(1596)年七月十二日大地震が起こり、 瓜生島の陥没などもあったが、津波により、神殿・拝 <u>殿・廻廊をはじめ、数多くの古い記録は流失</u>し、わず かに諸神官所持のものを残すのみである。こうした被 害のため、しばらくは奈多宮は雨露をしのぐ仮殿だっ たが、元和二(1616)年細川忠興によって宇佐行幸会 が、古式に則り盛大に行われたが、この時奈多宮司 は欠員で、翌年3人の競争者を、神前でくじによって 井門長右衛門に決定し、寛永四(1627)年奈多宮は建 物の根本的な造営が完成した。

⑩第九編 文化財 (奈多宮の楼門)

寛永四(1627)年のこと, 領主細川忠興は, 長岡式部 少輔に, 「当社の再興あるべし」と, 白銀 36 貫目を寄進し, 慶長元(1596)年の大海嘯で, あとかたもなく全壊した, 社殿の再建に着手した.

片山八郎兵衛門幸増が請負って資材を集め,大工 や職人をえらび,本殿と拝殿を造営した.

4.3 史資料のまとめ

精査の結果,歴史地震史料としてはこれまで知られていなかった,「一楼台」の額と『閑居口号』を発掘した.前掲した史資料の情報を,被害地点毎に整理すると表 2 のようになる.被害地点としては,守江湾(納屋御堂,磯崎八幡,神場州・神場御旅所),奈多宮,奈多宮沖(市杵島),安岐(加茂社)の記録を確認した.このうち,納屋御堂,神場州,奈多宮については,羽鳥(1985)で津波高の推定が行われている.これまで知られていなかった地点としては,磯崎八幡,神場御旅所,市杵島,加茂社があげられる.奈多宮の若宮殿が流されなかったという情報(4.1.2②)も既往の研究では取り上げられていないものである.

江戸期の史料としては、「一楼台」の額、『閑居口号』、『豊城世譜』の3つを得た.最も古い史料である「一楼台」の額には、津波で社殿が浸水したことを書き留めるが、流失したとまでは述べていない.『豊城世譜』と『閑居口号』における奈多宮の記述を比較すると、

『豊城世譜』:

「奈多宮本社拝殿楼門鳥居残なく沈没す」 『閑居口号』:

「本社拝殿楼門鳥居, 不残潮にひかれてあとかたなく成りける」

という具合であり、両者の情報は、表現は若干異なるが内容は同一である。神場州における情報も同様である。したがって、『豊城世譜』は『閑居口号』や『豊府聞書』などを引用して編纂されたものであるが、奈多宮に関する記述は『閑居口号』から情報を得たと考えてよいであろう。

また、明治期以降に成立した資料に収録されている情報についても精査したところ、そのほとんどは『閑

居口号』に含まれるものであり、当該地域における情報量が最も豊富な史料は『閑居口号』となる. ただ、近年の情報の中で、『閑居口号』に含まれないものとして、納屋御堂の情報があげられる. 納屋御堂については、『杵築史考』まで遡ることができたが、その原典にまではたどり着けていないことは 4.2.1 で述べた通りである.

§ 5. 奈多宮周辺における津波高の推定

今回の発掘で、これまで知られていなかった神場御旅所や加茂社等の津波被害の情報も得ることができた。そこで、奈多宮の津波高について論じる前に、これら奈多宮周辺の津波高について述べておきたい。推定に用いる情報については、既往研究と対比した形で表3に整理した。

5.1.1 納屋御堂

納屋御堂については、表 3 に示す通り、羽鳥 (1985)が根拠とした『杵築郷土史』も本研究で用いる『杵築市考』も内容的には同じものであり、今回新しい情報が得られたものではない、羽鳥(1985)は、納屋御堂の津波高を 4~5 mと推定しているが、近傍の神場御旅所において本研究で推定した値(後述)とも整合的である。よって、羽鳥(1985)の値を採用することとする。

5.1.2 磯崎八幡

磯崎八幡については、4.1.2⑤で記載したとおり地 震後に遷宮され天村八幡となっており、地震前の位 置を特定できない。天村川の右岸側の海岸近くには 現在も磯崎地蔵が残るため、この付近にあったので はないかと思われるが、八幡の位置及び標高の特定 は困難である。したがって、津波高の推定もできな い。

5.1.3 神場州

奈多宮の西約4 km に位置する神場州では、砂嘴が「津波に悉く打崩して跡形もなく」なったのであるからある程度高い津波高が推定される.その被害状況は、納屋御堂の被害と類似しているところがある.しかしながら、津波高の推定は難しく、御旅所における推定に委ねたい.

5.1.4 神場御旅所

『閑居口号』には、「神場御旅所の御殿諸楼等、潮に引きとられ、今は磴の石ばかり残れる」とある.しかし、「されども其翌年は神場の跡に仮殿を志つらひ、行幸なし奉る」とあり(4.1.2④)、御旅所が早期に復旧され、行幸会が施行されていることから、地域(村落)が消滅するような被害ではなかったと考える.また、寛村は「潮みちぬれば難所なり、岩間を伝ひ行き、矢辺

の入江を渡り神場にたどり着きぬ. 」と書いている (4.1.2④)ことから, 奈多宮から美濃崎(御野崎:図 6) を経て海岸伝いに神場に入ったと考えられる. そして, 上記記述を残した後、「道すがら此物語りを聞きて行 けば、無程住吉大明神の鳥居に至る」と記している (4.1.24) ことから、神場御旅所は住吉社(図 8,1689 年奉祀)の南付近にその中心があったと推測する、実 際にその周辺には神場という地名が現在も残ってい る(図 8). さらに『大分県の地名』「平凡社(1995)]に は「(神場御旅所の)跡に小祠のみが残る」とあるが、 現在海岸付近に小祠があり(図8),神場御旅所は図 8 で楕円に示す付近にあったと考える. そして当地の 地盤高は3m程度であり、地域(村落)が消滅するよう な被害でなかったことも斟酌し浸水深を首藤(1992)に 基づいて木造家屋が全面破壊する下限値の2mとす ると, 津波高は 5 m 程度と推定できる. 羽鳥(1985)は 神場州の津波高を 4~5 m としているが、これと整合 的な値である.

5.1.5 市杵島

市杵島における記述は、「津波に打崩しける」という情報にとどまり、津波高の推定は困難と考える.

5.1.6 加茂社

加茂社は, 奈多宮の北約4kmの位置にあり, 現大分空港の近く, 安岐川河口の左岸側にある.

『閑居口号』には、「昔より石の華表ありしが、慶長元年七月の津浪に打ち倒れ」とある。ここで、『大分県社寺名勝図録』[上田(1904)]には河口近くに鳥居(現存せず)を確認できる(図 9). 倒壊した華表(鳥居)はこの位置にあったのではないかと考えられる。この付近の現在の地盤高は2m程度であり、浸水深を首藤(1992)の知見から約2mとすると津波高としては4m程度が推定される。

さらに寛村は, 奈多宮, 神場御旅所, 磯崎八幡で 社殿等が流された場合には、その旨を明記し、かつ 再興された場合にはその模様も記録している. 加茂 社については鳥居の流失と再建について言及してい るものの、それ以外の被害には触れていない. したが って社殿は流失しなかったものと考える. 『閑居口号』 によれば、加茂社は、創建当初は現在地の上にある 小高き所に叢祠が造立されたが、その後、崖の下に 社殿を移したとされている. 現存社殿は背後に自然 丘陵を擁し、『閑居口号』の記述とも整合するとともに、 神社に相応しい地にあるといえる(図 10). したがって, 豊後地震時も現在地(地盤高約3m)に鎮座していた と推測できる. 社殿(拝殿)が流失しなかったことから 浸水深は2mを超えるものではなく,1m程度と仮定 すると, 津波高としては 4 m 程度が推定される. 鳥居 から推定した値とも一致する.

5.1.7 興導寺

興導寺は加茂社よりもさらに北, 奈多宮の北 15 km にある(図 6). 史資料を精査した § 4では取り上げなかったが, 興導寺が所蔵する『大般若波羅蜜多経巻第四百二十四奥書』には,「文禄五年丙申閏七月九日大地震仕豊後奥浜悉ク海成人畜二千余死ス前代未聞条書付申畢(異筆)「奥浜計一万人死ストモ」当宮司豪泉記之」との記述がある. ここに書かれているのは奥浜/沖の浜(現大分市. 図 1)の津波被害の模様であり, 国東市周辺での津波被害は記載されていない. 国東市周辺で大きな津波被害があれば, 当然書かれて然るべきと思われる. 記述がないということは, 大きな被害はなく, つまり興導寺周辺での津波高は高くなかったと推察する.

§6. 奈多宮の津波高の検証

では、§ 4で発掘した「一楼台」の額及び『閑居口号』の情報や、§ 5で整理した周辺情報に基づいて奈多宮の津波高について検証したい. 先行研究では、奈多宮の社殿流失を根拠として津波高の推定を行っていることから、まずはこの点を重視して検証することとする. 社殿流失の根拠となる江戸期の記述を確認の意味で再掲すると、主な記述としては「諸殿没溺于蒼海、為松浜矣」(「一楼台」の額)、「本社拝殿楼門鳥居、不残潮にひかれてあとかたなく成りける」、「本社拝殿悉く汐にて打潰」(ともに『閑居口号』)が挙げられる.

6.1 社殿流失を支持する知見

前述したように先行研究が根拠とした『豊城世譜』は『閑居口号』からの引用である。『閑居口号』には拝殿等の流失が明記されており、社殿流失を証する史料の成立年が、従来の地震の約240年後から約100年後に遡る。さらに「一楼台」の額の裏文は、奈多宮社殿を津波が襲ったことを証するものであり、70年後迄遡る。これらの史料より、豊後地震の際、津波が奈多宮を襲ったことは間違いないと考える。

6.2 社殿流失に疑問を抱かせる知見

「一楼台」の額(1663 年成立)の裏文は、「諸殿没溺于蒼海、為松浜矣」と書かれているに過ぎず、明確に社殿流失を記しているものではない。一方で 1711 年成立の『閑居口号』では、「本社拝殿楼門鳥居、不残潮にひかれてあとかたなく成りける」とあり、流失を明記している。両者の表現は微妙に異なっているが、これらから社殿の一切が流失したとする解釈もできるであろう。実際に、『杵築郷土史』では「八幡奈多宮の神殿神庫社殿悉く海嘯のために流さる」(4.2.2)としている。そして、その解釈を採用した都司・他(2012)は、社殿を一掃するような津波高として、8.4 m という値を推定している。

しかし、社殿流失やこのような高い津波高に疑問を 抱かせる記述を、今回、『閑居口号』に確認した. 既 に4.1.2②で紹介したように、「本社拝殿楼門鳥居、不 残潮にひかれてあとかたなく成りける」の記述に続い て、「若宮殿一宇、少しも損じ不申事奇代なりける」と ある. 流失しなかった建造物があることを記しているの である. 先行研究ではこの一文について全く触れて おらず、社殿の全てが流されたものとして津波高の推 定を行っている. 新たな史料が確認されたいま、これ も考慮して、言い換えれば、奈多宮には流された建 造物(本社拝殿楼門鳥居)もあり、流されなかった建 造物(若宮殿、図 11)もあったということを考慮して、 津波高を再評価すべきと考える. 特に「若宮殿残存」 は、津波高推定において重要視すべき情報である.

6.3 さらなる疑問

奈多宮の宝物にも不思議な点が見られる. 地震の 前, 奈多宮には「一楼台」の額を含み4つの扁額があ ったが、津波で全て流失したと言われる「『杵築市誌』 (2005)]. 一方では奈多宮には今も多くの宝物が現存 する. 奈多宮に現存する宝物のリストを表 4 に示す. 例えば『八幡三神像』(平安期作,図 12)や『宇佐八 幡御託宣集』(1456年行脚僧道成筆写して奉納)等は、 豊後地震前のものである. 明治期に調査された『神 社古記古文書調書』[大分県(1885)]には表 5 のよう な宝物がリストアップされている. その中には応永年 間(1394~1428 年)の年記があるものが 2 点(『縁起 書』, 『野太刀』) 含まれる. ここで, 『縁起書』(表 5) な る史料に着目すると、応永十一年(1404年)永興寺僧 快位の奥書ありとされている. 最新のリスト(表 4)にお ける『宇佐八幡御託宣集』も応永十一年の快位の奥 書がある.したがって、明治期の『縁起書』は現在の 『宇佐八幡御託宣集』のことであると判断される. 現存 する『宇佐八幡御託宣集』や『大神刀(野太刀)』は明 治期にも存在を確認できるのである. 津波で全てが 流失したとするならば、なぜこうした宝物が今も残るの か. 前項で行った「奈多宮には流されなかった建造 物もあった」という推察を裏付けるものだと考える.

6.4 本殿が流失しなかった可能性

さらに、『八幡三神像』について考えてみたい. 三神像とは『僧形八幡神坐像(伝応神天皇)』、『女神坐像(伝は売大神)』の3つをいい、何れも木製である. 国の重要文化財にも指定されている. また『若宮四神像』という神像もあり、現・奈多宮の場合は応神天皇の子、即ち後の仁徳天皇ら四若宮像(若比古、若比売、宇礼、久礼)を指す. これらの神像は、現在、宝物殿(昭和四十九年新設)に安座されているが、本来、三神像は本殿に、四神像は御祭神の子神を祀る神社である若宮殿に収蔵されるべきものであろう. ここで、現・若宮殿が本殿(祭

神)に向かって建っている(図 11, 図 13)ことに留意し たい. 即ち拝殿, 参詣者の方を向いていないのであ る[本殿のもう一方の側(本殿に向かって左側)に鎮 座する産霊社は本殿と同じ向き, 即ち拝殿の方を向 いている(図 13).].前述した神像の関係「本殿(祭 神)と若宮殿(子神)]に鑑みれば若宮殿の向きは当 然の事といえる、そして一般論として若宮殿が本殿よ り高い地盤に位置することは考えられない. 敬神思想 の篤い時代では当然の配置である. 即ち, 若宮殿の 地盤高は、本殿と同一かもしくはそれ以下とするのが 常識である. 例えば, 奈多宮とゆかりの深い宇佐宮を みても、本殿の地盤高は若宮殿よりも10 m程度高く、 若宮殿は本殿を向いて見上げている状況にある.し たがって, 奈多宮の若宮殿は文禄期も本殿の近傍に 鎮座して、本殿と同等かもしくはより低い地盤高に位 置し、本殿の方を向いていたと推測する. そうだとす ると、若宮殿が流失しなかったという記述からは、本 殿も流失しなった可能性が生れてくる. しかしながら 『閑居口号』では、「本社拝殿悉く汐にて打潰」とされ ており、本殿が流失したとも読める.この矛盾をどう解 釈すればよいのかという疑問が沸く.

6.5 本殿は流失しなかった

自然体で考えれば、若宮殿が津波で流れなかったということは、それと同レベルかより高い地盤にあった本殿が津波で倒壊し、流されたとは考えられない、従来、奈多宮本殿は津波で流失したと考えられてきたが、筆者らは津波では倒壊・流失しなかったと考える。その根拠を史料の観点から考察し、先に提示した矛盾を解消したい。

本殿が流失したと初出するのは『杵築郷土史』の 「八幡奈多宮の神殿神庫社殿悉く海嘯のために流さ る」である. 『閑居口号』の本社という言葉を神殿(本 殿)と解釈したものと思われる. 江戸期の史料は3つ あるが、「一楼台」の額には、「諸殿没溺于蒼海、為松 浜矣」と書かれているだけで、本殿とは明記していな いし、流失したとも書かれていない. 『閑居口号』や 『豊城世譜』も「本社拝殿楼門鳥居」が流失したと書 かれているものであり、本殿とは明記されていない. 江戸期の史料で本殿流失を明記するものはないので ある. ここで「一楼台」の額と『閑居口号』の表現の違 い、特に「諸殿」と「本社拝殿楼門鳥居」について考 察してみたい. まず「一楼台」の額であるが, 本殿が 被害を受けたのであれば、本殿(神殿)と明記するの が自然ではなかろうか. 最も尊ぶべき神の鎮座する 建造物であり、何をおいても記すべき情報である. 『閑居口号』では、「神場御旅所の御殿諸楼等、潮に 引取られ (4.1.2④)と、御殿(本殿)と諸楼(諸殿)を 区別して記述している. つまり諸殿とは本殿を含まな い建造物群を指すと解釈する. 次に「本社拝殿楼門 鳥居」であるが、従来これは、本殿・拝殿・楼門・鳥居

と解釈されてきた. この「本殿」という言葉であるが、そ もそも「「本殿」は近世以降の一般的用語であり、古く は正殿・宝殿・御殿・神殿などと記されるほうが普通で ある」[三浦(2013)]. ここで、最も情報が豊富な『閑居 口号』を詳しく調べると、寛村は本殿を指すと思われ る言葉として、「神殿」「本殿」「御殿」「本社」を用いて おり、用語を厳密に使い分けているのかどうか不明確 なところがある. そこで、「本社拝殿」の意味は本殿と 拝殿という意味ではなく, 奈多宮における本社・摂 社・末社のうちの本社の拝殿というように解釈する. 実 際,現在の奈多宮には祖霊社(末社)にも拝殿がある (図 13). また図 9 の加茂社にも「本社拝殿」という表 記を確認でき、特別な表現ではないといえる. したが って, 『閑居口号』は奈多宮本社の拝殿, 楼門, 鳥居 が流れたと記述していると解釈すると、「一楼台」の額 と『閑居口号』の微妙な表現の違いは矛盾なく解釈で きる. つまり、「一楼台」の額は本殿を除く複数の建造 物が浸水したと述べ、『閑居口号』は、それら建造物 のうち、本社の拝殿・楼門・鳥居が流失したと記して いるのである. そして, 本殿が流失したという記述はな いという結論が導きだされる. 本殿・若宮殿が流れな かったのであるから、『八幡三神像』や『若宮四神像』 が現存する理由も解決する. そうした場合, 先行研究 で採用されてきた「社殿流失」は、「本殿流失」ではな く、「拝殿・楼門流失」と考えて推定を行うべきといえ

それでは、何故、本殿が流失したように伝承されて きたのか、あるいは『杵築郷土史』は神殿(本殿)流失 と解釈したのか. それは本殿が地震動で大きな被害 を受けたためと考える. 津波で流失した拝殿等の造 営が寛永四年(1627年)に行われた際, 地震で損壊し た本殿も一緒に造替されたため、本殿も流失したと誤 って解釈されたのではなかろうか. 本殿が地震動で 大きな被害を受けたとする根拠は社殿の老朽劣化で ある. 一般的に、「檜皮葺の耐用年限は30年から40 年である [三浦(2013)]. 奈多宮の場合, 地震後の本 殿再建は寛永四年(1627年)に完成したことは先に述 べたが、『閑居口号』には、「本社造営以後四十余年 に及びしかは, 上葺所々破損によって, 寺社支配方 へ訴ければ, 則葺替被仰付, 其時棟札あり, …(略) …寛文屠緒(維)作噩應鐘」とある. これは寛文十年 (1669年)十月のことである. つまり, 建築後 40年を 経て屋根の葺き替えをせざるを得ない状況となったこ とを示している. 豊後地震前に翻ると, 奈多宮本殿は 天文十五年(1546年)に造替されている(4.1.1で示し た「一楼台」の額の裏文にその記述がある). その造 替から年数を経て躯体の劣化が進行し、葺き替えが 必要な時期を迎えたが、天正十五年(1587年)に大宮 司家が没落し、建造物の維持が困難となった. さらに 文禄の役での失態により、1593年大友家が廃絶とな ったこともあり、 葺き替えを行うことができず建造物の

劣化(腐朽)が急激に進行し、そこに豊後地震による 地震動を受け本殿が損壊した.あるいは、閏七月九 日に伊予地震が、十二日に豊後地震が起きたとする 見解もあり、二度の強震動を受けて本殿が損壊した 可能性もありうると考える.

6.6 奈多宮の津波高

これまで論じてきたように、奈多宮の津波高推定においては、先行研究で用いられてきた「社殿流失」ではなく、「若宮殿残存」と「拝殿・楼門流失」を根拠に行うべきと考える.

まず、「若宮殿残存」情報から、津波高の推定を試 みたい. 現在の奈多宮社殿(本殿・拝殿)は周囲の中 では比較的高い地盤にあり、その標高は6 m 程度で ある(図3). 羽鳥(1985)も T.P.+6.1 m, 都司・他(2012) も T.P.+6.36 m と測定している. 奈多宮周辺の地盤は 本殿の北側及び西側の隣接地がやや高く、最も高い 地点の地盤高は 7~8 m 程度である. この土地は, 玉 垣外にあり明治期以降の盛土の可能性もあると考え るが、仮に地震当時にこの土地が存在したとしても、 若宮殿がここに配置された歴史はないと考える. それ は、若宮殿の性格上、本殿よりも高位に配置されるこ とはありえず、このごく狭い標高 7~8 m のスペースに 本殿と若宮殿を配置することは物理的に不可能であ るからである. そして, 奈多宮全体として津波で壊滅 的な被害を受けたにも拘らず, 若宮殿が被害を受け なかったという事実と整合する境内配置を考えるなら ば、若宮殿の当時の標高は現在の6mと同等かそれ より少し低い位置しかありえない. そこで, 仮に若宮 殿が現在の位置(標高約 6 m)にあったと仮定するな らば、無被害であった(「少しも損し不」と記述されて いる)ことから、 首藤(1992)の知見に照らすと浸水深 1 m以上の津波は考えられず,つまり津波高は7mより も低かったという結論が得られるのである.

次に、「拝殿・楼門流失」情報から推定してみたい. 奈多宮の御池や御旅所は広い範囲に存在し(図6), 『閑居口号』には、「往古はこの川端に奈多八幡の一 の鳥居在りとかや」と、奈多宮の一の鳥居(図 6)が安 岐川の左岸付近にあったことが記されている. ゆえに 豊後地震以前は神社敷地として広大なスペースを有 していたと思われるが、地震後に再建された同宮は、 四周(約50 m 四方)が玉垣で囲まれた比較的コンパ クトな社殿レイアウト(図 3, 図 13)となっている. さらに 楼門から本殿までの距離が短いこと(図3)や,鳥居と 楼門が近すぎること(図 2)に違和感がある.このため 現在のレイアウトから,豊後地震当時にあった重層構 造(2 階建て以上)の「一楼台」や「海雲楼」を持つ奈 多宮の姿を判断することはできないと考える. つまり 現有する情報だけからは拝殿・楼門の位置特定は困 難といえる. しかし, 地盤高については「拝殿・楼門流 失」の事実及び「若宮殿残存」情報から推定可能であ

ると考える. ここで今一度現在の社殿レイアウトに着 目したい. 現存する社殿は、標高 6 m 程度の地盤に、 本殿, 若宮殿, 拝殿, 楼門, 鳥居等が集中する. 流 失の事実から地震時に標高 6 m にはなかったと考え られる拝殿と楼門(筆者らは地震時のこれらの地盤高 は4m以下と考える)が、地震後に何故狭い6mの地 盤に本殿と一緒に密集して再建されたのか(拝殿は 1627 年の再建. 4.1.2②参照). それは, 再び津波被 害を受けないよう、 高所に再建したと考えるのが自然 ではなかろうか. これは東日本大震災の復旧過程で 行われている, 住戸の高台移転に相通じるものであ る. 当時の神社関係者が「流失という過ち」を二度と 繰り返さないため考えた当然の帰結であろう. すなわ ち, 津波は標高 6 m には達しなかったのである. しか しながら、より低い地盤(4 m 以下)に位置した拝殿・ 楼門が流失し、そこに掲げられていた扁額が建造物 と一緒に消失したと考える.

さらに別の観点から考察してみたい. §5で推定し た奈多宮周辺の津波高である. これらの推定値を図 14 に示す. 奈多宮の西に位置する神場御旅所での 津波高は5 m 程度である. 一方, 奈多宮の北に位置 する加茂社での津波高は4m程度である.加茂社や 神場御旅所は, 奈多宮と4 km程度しか離れていない. さらに図14には別府湾の他地点の津波高も示す.他 地点の値としては大分県の推定値である平井(2013) および最新の研究成果である松崎・他(2015)を図示 した. これらは別府湾南岸の値であるが、津波高は4 ~6 m 程度である. 地形的に見ても, 奈多宮地点は 波が集中する岬状の地形ではなく(図14),前面には 砂浜が広がっている(図 3). 筆者らは津波工学の専 門家ではないが、津波高が特に大きく増幅するような 地点とは思えない. さらに、「豊後地震津波において 津波が高かった範囲は別府湾沿岸に限定され, 周防 国上関に被害はなかった」[松崎・平井(2014)]ことや, 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2005)が豊 後地震の波源とする別府湾一百出生断層帯東部と の位置関係(図 14)から勘案すると、国東半島の東岸 においては、全体的には北ほど津波高は低かったも のと推定される. 実際, 奈多宮の北約 15 km の興導 寺では津波被害は知られていない. したがって, これ らの事実から総合的に考えると, 奈多宮周辺におけ る津波高も 4~5 m 程度ではなかったかと推察され る.

以上のように、奈多宮に関する記述からは 6 m 以下の津波高が推定され、周辺の記録からは 4~5 m が推察された. 奈多宮単独で推定した 6 m 以下という値は、周辺情報から推察される値よりも若干高めである. したがって、奈多宮の津波高は 6 m よりももう少し低い可能性も考えられるが、今後新たな史料・知見が確認された際に検証することとして、本研究においては 6 m 以下と推定するに留めたい.

§ 7. まとめ

今回,新しい歴史地震史料として「一楼台」の額や 『閑居口号』を確認した. 『閑居口号』にはこれまで知 られていなかった地点の津波被害記述があり、これを 基に神場御旅所の津波高を 5 m 程度, 加茂社の津 波高を 4 m 程度と推定した. また, 従来, 本殿・拝殿 等の全ての建造物が流失したものとして津波高の推 定が行われていた奈多宮では、若宮殿が流失しなか ったという事実が確認された. さらに、『閑居口号』の 記述を分析した結果及び『八幡三神像』等の宝物が 現存することから本殿も流失しなかったという結論に 至った. 流失した建造物は, 拝殿, 楼門, 鳥居と判断 される. 先行研究では本殿を含む「社殿流失」を根拠 に津波高を 7~8 m や 8.4 m とする推定を行ったが、 正しくは「若宮殿残存」、「拝殿・楼門流失」を根拠とし て津波高を推定すべきであることを示した. そして, 若宮殿が流失しなかったことからは、当地の地形に 鑑みると7mを超える津波は考えられないといえる.さ らに、豊後地震時には標高6mよりも低い地盤にあっ たと考えられる拝殿や楼門が, 地震後に標高 6 m の 地盤に再建されていることから、 拝殿や楼門は再び 津波被害を受けない高さに再建されたと考え,豊後 地震における奈多宮の津波高さを 6 m 以下と判断し た.

謝辞

本稿の作成にあたって、匿名の査読者ならびに編集出版委員の行谷佑一氏から極めて有益なご意見を頂き、本論文の改善に非常に役立ちました。ここに記して深く感謝の意を表します。

対象地震:1596年豊後地震

文 献

安岐町史編集委員会, 1967, 安岐町史, 979 pp. 羽鳥徳太郎, 1985, 別府湾沿岸における慶長元年 (1596 年)豊後地震の津波調査, 地震研究所彙 報, **60**, 429-438.

平凡社, 1995, 日本歴史地名大系 45 大分県の地名, 461.

平井義人, 2013, 古文書に見る大分の地震・津波, 大分県立先哲史料館研究紀要, **17**, 13-28.

地震調査研究推進本部地震調査委員会,2005,別府-万年山断層帯の長期評価について,http://jishin.go.jp/main/chousa/katsudansou_pdf/92_beppu_haneyama.pdf(閲覧日:2015年11月14日)

北村清士, 1962, 藩祖中川秀成公三百五十年祭典誌, 100 pp.

杵築市教育委員会, 1978, 杵築市の文化財(第二集), 42-43.

杵築町教育会, 1933, 杵築郷土史, 21.

杵築藩研究会, 1993, 閑居口号, 130 pp.

杵築市誌刊行会, 1968, 杵築市誌, 941 pp.

杵築市誌編集委員会, 2005, 杵築市誌, 1081 pp.

久米忠臣, 1997, 豊城世譜, 186 pp.

国東町史刊行会, 1973, 国東町史, 884 pp.

前田光利, 1914, 杵築史考, 191.

松崎伸一・平井義人, 2014, 『玄與日記』が記す「かみの關」地点の比定(1596 年豊後地震), 歴史地震, **29**, 183-193.

松崎伸一・日名子健二・平井義人,2015,文禄五年 豊後地震における早吸日女神社の津波痕跡高 の推定,歴史地震,30,23-42.

三浦正幸, 2013, 神社の本殿 建築にみる神の空間, 吉川弘文館発行, 239 pp.

中野泰行編, 1875, 八幡奈多社詳細記, 469 pp.

七山太・池田倫治・大塚一広・三浦健一郎・金山清 ー・小林修二・長谷川正・杉山雄一・佃栄吉, 2002, 伊予灘〜佐賀関沖MTL活断層系の広域 イメージングとセグメント区分, 産業技術総合研 究所地質調査総合センター, 活断層・古地震研 究報告, 2, 141-152.

大分県,1885,神社古記古文書調書,大分県行政資料(明治期行政文書).

大分県、2014、大分県地域防災計画―地震・津波対策編―(平成26年6月)修正の経過、http://www.pref.oita.jp/soshiki/13550/oitakenchiikibousaikeikaku.html、http://www.pref.oita.jp/uploaded/attachment/188008.pdf(閲覧日:2015年11月14日)

島崎邦彦・松岡裕美・岡村眞・千田昇・中田高,2000, 別府湾の海底活断層分布,月刊地球/号外, **28**,79-84.

首藤伸夫, 1992, 津波強度と被害, 東北大学津波工学研究報告, **9**, 101-136.

田中雅章・小西克文・國西達也・清水雄一・高智英二郎,2010,瀬戸内海西部海域における活断層の発見とそのテクトニクスについて,日本応用地質学会平成22年度研究発表会,93.

都司嘉宣・松岡祐也・行谷佑一・今井健太郎・岩瀬浩 之・原信彦・今村文彦,2012,大分県における 1596 年豊後地震の津波痕跡に関する現地調査 報告,津波工学研究報告,29,181-188.

上田延成, 1904, 大分県社寺名勝図録, 44-47.

史 料

『八幡奈多宮年中行事之次第』(室町後期作):中野泰行編,1875,『八幡奈多社詳細記』に収載.

『豊城世譜』(是永六雅, 1834): 久米忠臣編集, 1997, 『豊城世譜』に収載.

『大般若波羅蜜多経 巻第四百二十四奥書』, 大分 県国東市興導寺所蔵.

『閑居口号』(諏訪寛村, 1711): 杵築藩研究会, 1993, 『閑居口号』に収載. 『宇佐八幡御託宣集』,奈多宮所蔵,1456年奉納.

表1 先行研究における津波高推定値とその根拠とした史資料 Table1 Tsunami height and evidences of previous studies

				0		
先行研究	地点	推定 津波高	先行研究が引用した記述	左記の出典とされる 史資料	出典における記載	『豊城世譜』の記述
	14 44 1-	** 0'~ L	「奈多八幡宮の神殿神庫社殿悉く海 嘯のため流さる」	『杵築郷土史』	「八幡奈多宮の神殿神庫社殿悉く 海嘯のために流さる」	「奈多宮 <u>本社拝殿楼門鳥居残りなく</u> <u>な没す</u> 」
	Ж У	■ 00 }	「本社拝殿楼門鳥居残らず沈没す」	『杵築郷土史』	記述なし	「奈多宮 <u>本社拝殿楼門鳥居残りなく</u> <u>沈没す</u> 」
羽鳥 (1985)	納屋御堂	4~5 m	「納屋御堂の地数十町海中に陥没せ り」	『杵築郷土史』	「納屋御堂の地数十町海中に陥没せり」	記述なし
	神場州	4∼5 m	「津波に沈没して水底と成、今十町 斗り沖に立たるミヲ木は、観音堂の 跡水底に残りし岩尾の上に建る。是 は土人(出入)の船の為に建置かし 也、其外沈没みつからず」	[藩祖中川秀成公三 百五十年祭典誌』	記述なし	「建波に沈没して水底と成り、今十 町斗り沖に立ちたるミヲ木は観音堂 の跡、水底に残りし岩の上に建て る. 是は出入の船の為に建置きしと 也. 其の外沈没少なからす」
			「八幡奈多宮の神殿神庫社殿悉く海 嘯のために流さる。」	『杵築郷土史』	「八幡奈多宮の神殿神庫社殿悉く 海嘯のために流さる」	「奈多宮 <u>本社拝殿楼門鳥居残りなく</u> <u>沈没す</u> 」
			「奈多宮本社拝殿楼門鳥居残なく沈 没す」	『豊城世譜』	「奈多宮本社拝殿楼門鳥居残りな く沈没す」	同左
都司・他 (2012)	於 <i>後</i> 回	8.4 m	「(前略)奈多八幡の <u>社殿は流失</u> し、海岸一帯は惨状を呈した。(前 略)さきに地震大津波で流失した奈 多八幡宮の再興と,百五十年間中絶 していた宇佐行幸会の復活である。 元和二(1616)年十一月八日みごとな 行幸会が行われた」	『国東町史』	「奈多八幡の社殿は流失し、海岸 一帯は修状を呈した」 「さきに地震大津波で流失した奈 多八幡宮の再興と,150年間中絶 していた宇佐行幸会の復活であ る.元和二(1616)年十一月八日み ごとな行幸会が行われた.」	「奈多宮 <u>本社拝殿楼門鳥居残りなく</u> <u>沈没寸」</u> (奈多宮の再興と行幸会の復活は 『閑居口号』に記述あり)
平井 (2013)	奈多宮	新6 m	「奈多宮本社拝殿楼門鳥居残りなく 沈没す.」	『豊城世譜』	「奈多宮本社拝殿楼門鳥居残りな く沈没す. 」	同左
下線は先行研究において引用された記述と	において引	用された記	3述と『豊城世譜』における記述との対比。	J.比。両者はほぼ整合的な内容である。	りな内容である。	

表 2 津波被害記録の整理 Table2 List of tsunami damage

		为人					4				400年	‡
1	华旧视	小仁色	44	#	TA TA	田米	11 人名	4	34. 30 AB.	共存配	所 多 四 车 十 幸 亚 车	女型
K III	** 医角型高级角型	磯崎八幡	表	件% 御旅所	消耗	後流印朱	属流额失	玉流》大	器 記漢 米米	和 と 大 を 大	3. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1	加及柱
「一楼台」 の額(1663)		×	×		教		(再奉納の事 実から流失 を判断でき る)	×	×	×		×
閑居口号 (1711)	×	大津波の時、勝両神株状に滅亡し、野形もなくなりし	(十 <u>円</u> の が が が に が が に が た が に が た が た が と が た が と が た が た が た が ら ら が ら ら が ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら	神場御旅所 の御殿諸楼 等, 潮に引 取られ		本社		被に引きと られ神宝旧 記も此時に 至て総先	被に引きと られ神宝田 記も此時に 至て紛失	番 世 地 国 瀬 一 地 国 瀬 一 一 地 国 瀬 一 か し む ま で イ エ は 国 関 に オ ロ 関 は は 日 関 は は な ま は な か	津波に打崩しける	曲またり が、 機をかっ は、 を を を に が に 打 の 離 だ に り の を め め の し に り に り に り に り で を り に し に り に り に り に り に り に り に り に が に が に が
豊城世譜 (1834)	×	×	津波に沈没 して水底と 成り	×		本社拝殿楼 門鳥居残り なく沈没す	×	×	×	×	×	×
杵築史考 (1914)	東村納屋御堂の北方白沙青松約数十町歩衛中に済むに天変地発の変を被り、一朝、現の災を被り、一朝にして、一角には、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一	×	×	×	×	×	×	奈多八幡社 宝庫の崩潰 漂流して, 宝物古器類 の欠損せし	×	×	×	×
杵築郷土史 (1933)	納屋御堂の地数十町海 中に陥没せり	×	×	×	八幡奈多宮の神殿神庫 社殿悉く海嘯のために 流さる	×	×	×	×	×	×	×
安岐町史 (1967)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
440	高須御堂の東一帯に あった, 松林が海中に 没した	らなみに消 され 社 間 も 一 さ お が た が た が が が が が が が が が が が が が が が	等端の を を を を を を を を を を を を を	機大ののなるでした。 を表しているない。 ののない。 ののは、 の。 の。 の。 の。 の。 の。 の。 の。 の。 の。	奈多八幡宮を流失 神殿・拝殿・廻廊をは じめ、数多くの古い記 録は流失 大海嘯であとかたもな く全壊	×	にの額 取の神政の 消失	×	社殿諸記録 みど, 一切 消失, 一切	×	田 本 を を を を を を な た た た の た が の た が の た が の た が の た で た が で に た で で が で が で が で が で が で が で が で が で が で が が で が で が で が で が が が が が が が が が が が が が	×
国東町史 (1973)	×	×	×	×	奈多八幡の社殿は流失 大津波で流失した奈多 八幡宮	×	×	×	×	×	×	×
杵築市誌 (2005)	高須御堂の東一帯にあった松林が海中に没した	神みたがたがな	住古浜の砂 嘴の先端が 数可叫にわ たって消失	×	奈多八幡宮を流失 一条天皇宸筆の額をは じめ、神殿・拝殿・回 廊など、数多くの古記 録は流失 大津波で流失した奈多 宮の神殿、日殿、拝殿	×	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	×	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	×	市杵島も変形	×
×: 記述なし	٠.											

表3 津波高の推定

Table 3. Estimated tsunami height.

	推定 津波高	4~5 m [羽鳥 (1985) を採用]	推定不能	御旅所 推定	5 m程度		6 m以下		推定不能	4 m程度
本研究	根拠	●『杵築史考』 「東村納屋御堂の北方白沙青松 約数十町歩海中に突出し一朝に して海底に陥没せり今や御本の 断崖僅かに其切片を存するの み」	●『閉居口号』 「叢祠神躰共に滅亡し,跡形も なくなりし」	●『閑居口号』 (十町斗りの州が) 「津波に悉く打崩して跡形もなく成りぬ」	● 『閑居口号』 「神場御旅所の御殿諸楼等,潮 に引取られ』	●『開居口号』 「本社拝殿楼門鳥居,不残潮に ひかれてあとかたなく成りけ る」	●『閑居口号』 「若宮殿一字,少しも損じ不」	●「一楼台」の額 「諸殿没溺于蒼海,為松浜矣」	● 『閑居口号』 「津波に打崩しける」	● 『閑居口号』 「昔より石の華表ありしが、慶 長元年七月の津浪に打ち倒れ」
	推定 津波高	I	I	I	I		約6 m		I	1
平井(2013)	根拠	I	I	I	I	● 『豊城世譜』 「奈多宮本社拝殿楼門鳥 居残りなく沈没す」			I	ı
	推定 津波高	I	I	I	I		8.4 m		I	I
都司・他(2012)	根拠	I	I	I	-	●『杵築郷土史』 「八幡奈多官の神殿神庫社殿悉 く海嘯のために流さる」 (原典は『豊城世譜』か) ●『豊城世譜』 「奈多宮本社拝殿楼門鳥居残な く沈没す」	●『国東町央』 「(前略) 奈多八幡の社殿は流失し、海岸一帯は惨状を呈した。(前略) さきに地震大弾球 は、(前略) さきに地震大津波	、仍天した系多へ幅音の井奥と、 百五十年間中絶していた宇佐行幸会の復活である. 元和二(1616)年十一月八日みごとな行幸会が行われた」	I	ı
	推定 津波高	4∼5 m	I	4 ∼5 m	I		7~8 m		I	1
羽鳥 (1985)	根拠	●『杵築郷土史』 「納屋御堂の地数十町海中に 陥没せり」 (原典は『杵築史考』)	I	● [豊城世譜』か 「律波に花没して水底と成. 今十町斗り神に立たるミヲ木 は、観音堂の跡水底に残りし 岩尾の上に種る. 是は土人の 船の為に種間かし也. 其外沈 没みつからず」	I	●『杵築郷土史』 「奈多八幡宮の神殿神庫社殿 悉く海嘯のため流さる」 (原典は『豊城世譜』か) ●『豊城世譜』か 「本社拝殿楼門鳥居残らず沈 没す」			I	I
	地点	神屋御堂	磯崎八幡	神場州	神場御旅所		欣 必 回		市杵島	加茂社

表 4 奈多宮に現存する宝物

Table 4. Extant treasures of Nada-gu.

名称	製作又は所蔵年次	慶長豊後地震での被害	備考
「日本最上八幡初中後廟」の額	永延二年(988年)	津波で流失し再製	再製年不詳
「一楼台」の額	康和年中(1099-1104年)	同上	寛文三年(1663年)再製
「三韓降伏」の額	平安期	同上	江戸中期再製
八幡三神像	平安期	現存	国重要文化財
若宮四神像	不詳 (三神像以降)	現存	県重要文化財
陣道面	応保二年(1162年)	現存	同上
宇佐八幡御託宣集 (十六巻)	応永十一年(1404年)[1456年奉納]	現存	同上
縁起箱	康正二年(1456年)奉納	現存	同上
大神刀 (九尺)	応永三十一年(1424年)	現存	同上
宇佐八幡絵巻 (二巻)	永禄三年(1560年)	現存	市重要文化財
八幡託宣集 (四巻)	不詳	現存	同上
伊勢物語 (写本)	大永年間(1520年)	現存	同上

この他,知行書,古鏡等あり

網掛けした宝物は明治期にも存在が確認されている (表5参照)

表 5 明治期に確認された宝物

Table 5. Treasures list of Nada-gu, researched in the Meiji period.

名称	『神社古記古文書調書	』(1885)の内容	備考	
20 17	製作又は所蔵年次	特記事項	加石	
扁額 (一条天皇宸筆)	永延二年(988年)		「日本最上八幡初中後廟」の額 正しくは拓本による再製(再製年不詳)	
扁額 (一楼台)	寛文三年(1663年)奉納	松堂隠元筆	消失した扁額は大江匡房筆	
扁額 (三韓降伏)	不詳	佐々木玄龍筆	消失した扁額は藤原道長筆	
縁起書	応永十一年(1404年)	永興寺僧快位謹書	宇佐八幡御託宣集	
野太刀	応永三十一年(1424年)			

この他, 棟札, 鏡, 剣, 文書等多数あり

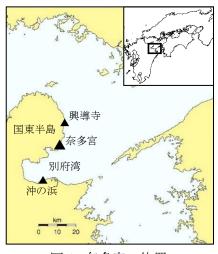


図1 奈多宮の位置

Fig.1. Location of Nada-gu.



図2 奈多宮[本殿, 拝殿, 楼門, 鳥居]

本殿(2015年8月17日撮影), 拝殿(2015年5月7日撮影), 楼門•鳥居(2015年12月19日撮影) Fig. 2. Main shrine, worship hall, tower gate and torii of Nada-gu.

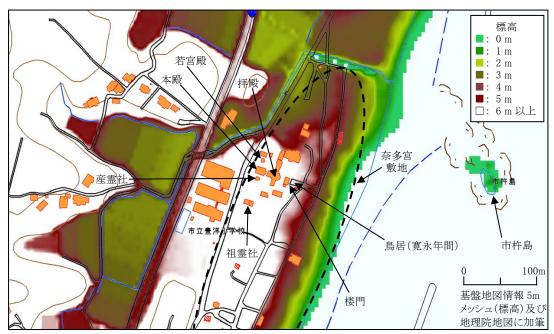


図3 奈多宮とその周辺.本図のカラー版は口絵3参照.

Fig. 3. Map around Nada-gu. See Frontispiece 3 for the color version.



図 4 市杵島(2013 年 6 月 6 日撮影) Fig. 4. Ichiki-isle.

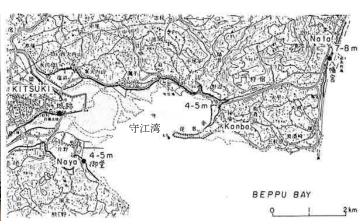


図 5 羽鳥(1985)による津波高 Fig. 5. Tsunami height of Hatori(1985).

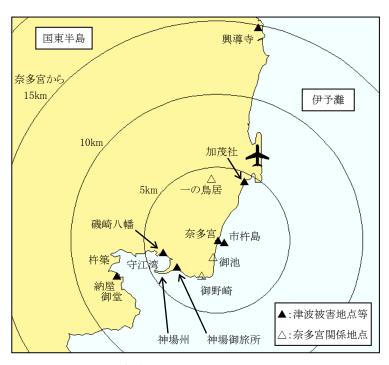


図 6 奈多宮周辺の津波被害地点 Fig. 6. Tsunami damage spots around Nada-gu.



図7「一楼台」の額(上:表面,下:裏面の刻文,竪壱尺三寸×横三尺三寸) (2015年8月17日撮影)

Fig. 7. Wooden tablet of "Ichiro-dai".

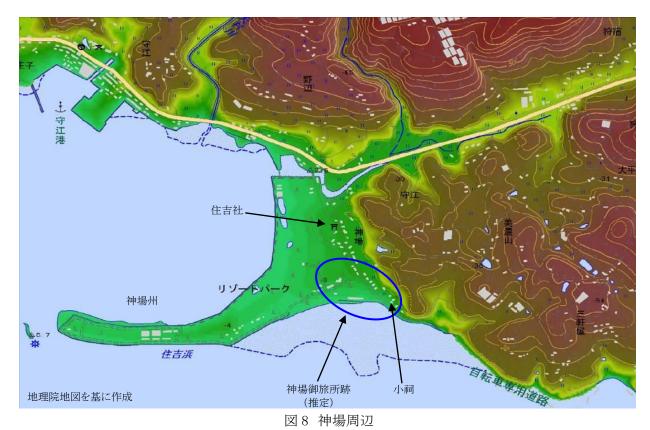


Fig.8 Topography around Kanba.

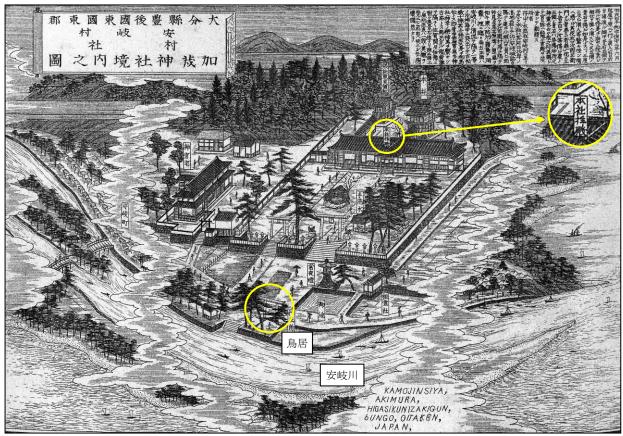


図 9 『大分県社寺名勝図録』(1904) 加茂社

Fig. 9. Kamo-shrine which appears in the illustrated book of shrines, temples and scenic beauties in Oita.



図 10 加茂社周辺(2015 年 6 月 3 日撮影) Fig.10. Topography around Kamo-shrine.



図 11 現在の若宮殿(2015年4月5日撮影. イン レットは 2015年8月17日撮影) Fig.11. Wakamiya-shrine of today.



図 12 八幡三神像 (2015 年 8 月 17 日撮影) Fig.12. 3 wooden god statues.

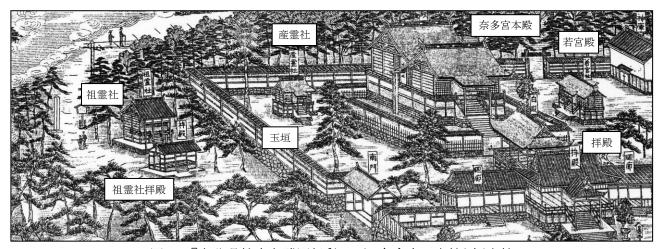


図 13 『大分県社寺名勝図録』(1904) 奈多宮の本社と摂末社

Fig.13. Nada-gu in the illustrated book of shrines, temples and scenic beauties in Oita.

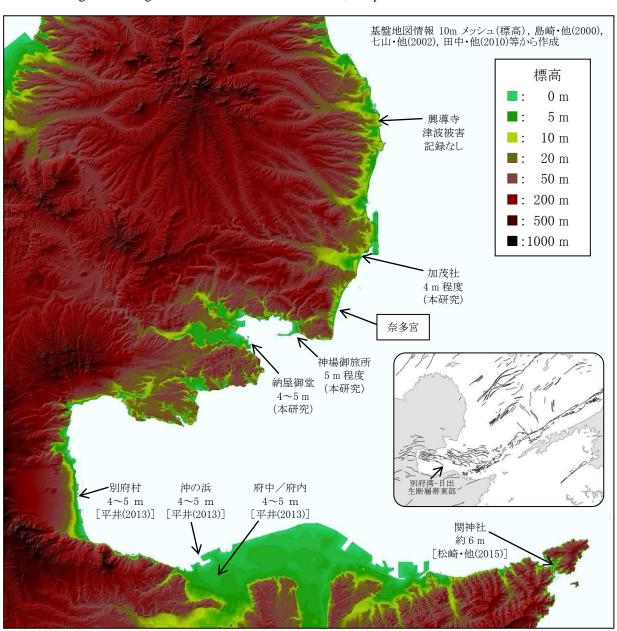


図 14 別府湾沿岸の津波高(推定値). 本図のカラー版は口絵 4 参照.

Fig.14. Estimated tsunami height around Beppu bay. See Frontispiece 4 for the color version.